

令和8年度 第1回 伊賀市多文化共生推進プラン委員会 議事概要

日 時：令和8年7月2日(木) 午後2時～3時45分

場 所：伊賀市役所本庁5階 501会議室

出席者：オチャンテ委員、井上委員、西岡委員、里中委員、前澤委員、上出委員、福岡委員、矢口委員、船見委員、山本委員、柳委員、樺委員、桃地委員

内 容：

1. あいさつ

2. 報告事項

伊賀市の外国人住民の状況

3. 議事

(1) 多文化共生推進プラン令和8年度事業計画について

事務局 (説明)

委員長 委員から追加の説明や何かご意見やご質問などはありませんか。

委員 伊賀市消防本部でも防災訓練や講座を企業と実施したいと考えていると聞いた。依頼があれば、チラシを多言語情報紙に入れるなどして今後連携して進めていく。

(2) 専門部会の結果について

事務局 (説明) 詳細は、議事(3)と併せて説明したい。

委員長 議事(3)と併せて説明いただくこととしてよろしいか。

委 員 (異議なし)

(3) 伊賀市多文化共生推進プラン(第2期)の骨子について

事務局 (説明)

委員長 ただいま説明がありました。これについて、ご意見などありませんか。

委 員 資料3 4-A-(1)日本語学習機会の拡充についてですが、日本語学習をしたくても教室が遠いと車が必要である。普段、自転車で行動している人も多いが、例えば大山田から上野まではなかなか行くのは難しい。

また、子どもの日本語指導では、初期適応指導教室があるが、上野東小学校へ行かないといけない。保護者の送迎が必要なため、1～2か月間通うには、保護者の負担が大きい。車の免許がまだない、仕事がある、午後1時くらいに終わる、となると通うのが難しい。これから通う小学校に教員の派遣などはできないか。

事務局 学校教育課と今のご意見を共有して、第2期のプランへの反映や今後の事業の検討につなげていく。

委員 初期適応教室へ通った後、本来通う学校でなじめるようなサポートが必要。東小学校ではなく、最初から本来通う学校で日本語指導を受けられれば、休み時間など、友達と交流する時間もとれて、だんだんとなじんでいけるのでは。そういった観点からも、初期適応教室のあり方をもう少し考えてほしい。

委員 資料4の15ページ、企業での日本語学習やキャリア形成の支援などは、大企業では支援もできるかもしれないが、小規模の事業所などでは、なかなか難しい。大きな企業が拠点となって周辺の事業所も一緒に学べるシステムはできないか。また、子どもや外国人が地域に溶け込むためにも、多文化共生は多文化共生課や健康福祉部など特定の部署だけの問題でないと思うので、市民センターなどで、日本に長く暮らす外国人や日本人のボランティア、文化的なことなどをつなげるような仕組みがあればいい。

子育ての時代からの情報発信は、いままでもウェルカムベビー教室などがあって、情報が伝わって行ってみようかなと思って、行ったら友達ができたり、子育てという共通のところから交流できることがある。なので、参加できるかどうかは個人個人、事情とかがあるので分からないが、情報がきちんと伝わる必要がある。子育てガイドブック（伊賀流未来応援の術）は母子手帳もらうときに渡していると聞いたが、多言語でできているのか。

あれも便利なので、子育てでも、いろんな段階があって年齢が違ったりもするが、それぞれの場面で情報提供ができていくといいと思う。

事務局 冊子の多言語での発行はしていないと思う。多言語対応できる部分など担当部署と調整していきたい。

地域の交流については、やさしい日本語を使った交流に向けての取組みをしていただいております。伊賀の伝丸に実施をお願いしています。やさしい日本語の講座をはじめ、交流につながるような事業を実施していただいている。地域のキーパーソンづくりにもつなげていきたい。

委員 10ページ、将来の姿の1点目、「卒業後」とは中学卒業後か高校卒業後かどちらか分からない。数値目標として高校への進学率100%を目指しているなら、高校卒業後か。2点目には高等教育を含めた将来の選択となっているので、どちらがいいか。

また、期待される主体の役割の行政のところにも、「卒業後」とあるが、「義務教育」となっていたところを見直しているので、これは中学か？高校卒業後までをサポートするのが理想であるということか。

高校卒業後までの支援が必要であるが、あけぼの高校がなくなることもあり、また、全国的に問題となっているのは中退率が高いこと。日本人の生徒はほとんどやめないのに、外国籍の子は10%弱。10人に1人が辞めてしまっている。辞めた後、どうなっているのか。高校入ってから卒業できるようにサポート

する。仮に辞めそうになっても転校や、辞めたとしても学びのやり直しも含めて。夜間中学ができたけれどもなかなか通えない。オーバーエイジの子が学べる場も必要。

伊賀は広いわりには大人向けの日本語教室は実質1箇所。地域的に（外国人が）点在してきた中で、学びの接点づくりを考えたとき、オンラインももちろんいいが、巡回型日本語教室はできないか。まずは月1回でもいいから、接点づくりが大事で、地域でやさしい日本語の出前講座をしたが、例えば、ちょっとお茶飲んでサロンのする日本語教室を地域でして、そこに日本語を教えられる人も入れてやってみて、それがよかったら、ノウハウを提供して地域でやってもらえたら、そこが接点となって、文化、子育てなど、世代や目的を超えた交流ができるのでは。公民館講座プラス出張型日本語教室。そういうのがあれば、気軽に、赤ちゃん連れた人や高校生など多様な人が集まれる。いきなりたくさん集まらなくてもいいから、接点づくりが始めるのがいいのではないか。

委員 やはり高校で辞める子が多いのが気になっていた。小中学校では先生が手厚くコミュニケーションをとってくれるということがあるが、高校ではそれがない。勉強も難しくなる。そうすると、そこで休んだり、成績が良くないと上がれない（進級できない）こともある。そういうことを親が分かっている。親が協力しないとなかなか大変だが、親は学校へ行ってくれているからそれでいいというところもある。きちんと学校へ行かないと進級できない、卒業できないということを繋がりのある親には知らせている。小中学校ではその辺のフォローがあるけれども、高校ではそこまでない。

以前は、日本語能力などで全日制はなかなかしんどかったが、今は入れる（子も多い）。入れるが、しんどさを相談できるところ、フォローできるところが必要。私自身は「学校大丈夫？」などの声かけをしている。中学校までがんばっていたのに、高校でなぜ行けなくなるんだろうと感じる子もいる。

伊賀から名張の高校へ行くと、友人たちの対応とかも違う。今までは、同じ学校に外国籍の子、ルーツのある子がたくさんいたが、高校で小中学校では味わったことのない寂しさを感じて、学校へ行けなくなった。伊賀は当たり前のように外国籍の友達がいるから、そこからそうじゃない子がいっぱいいるところに行くと、ちょっとうまくいかなくてしんどくなったということがあった。

次に、先ほどの委員が言ってくれた日本語教室ですが、今は三重県でも堅苦しい日本語教室ではなく、サロン形式の日本語学習の場というのを推している。テキストもできている。先生と生徒ではなく、地域の人としてサポートしていく感覚で、地域で広げていこうと国から県へと推進している。伊賀市でも地域での交流を増やしていくために、地域で日本語教室ができればいいな。

副委員 他にございませんか。

長

事務局 先ほどから委員からありました高校の問題や、地域での日本語教室について、第2期プランの中でも考えていきたい。

また、本日欠席の委員からご意見をいただいているので、紹介させていただきたい。

まず、資料4のプラン第2期の骨子について、施策の展開の「成果」と「取組」の区別があいまいだという点。成果の内容には実施したいくつかの取組事例を掲載しているように思うが、次の項目の課題には、その取り組みの成果が十分でないという表現も散見され、成果があったのか、取り組んだが成果が見えていないのか、分かりにくい。成果であれば、どのように良くなったかが分かるように表現した方がいいのではないかと。

2点目は、「オール伊賀市」の取組みを進める体制について。指針の基本理念に「オール伊賀市で取り組む」とある。各主体がそれぞれ活動するだけでなく、それらをつなぎ、地域課題を共有し、必要な連携を生み出す推進体制についても、今後検討していく必要があると考える。現状では、情報共有が中心となっているが、多文化共生を地域全体で効果的に進めていくためには、中間支援機能やコーディネート機能を担う仕組みについても、将来的な視点として意識し、検討していくことが重要だと思う。取り組みの報告を聞き、課題を確認するだけでなく、どうしたら「オール伊賀市」でできるかを考えることから始める必要がある。

以上です。

副委員 他にございませんか。

長 無いようでしたら、委員からの意見を踏まえ、事務局で再度まとめていただきたいと思います。

事務局 それでは、本日いただいたご意見を踏まえ、事務局で骨子案をまとめ、委員のみなさまにご報告したい。なお、内容については、委員長の承認をもって進めたい。

副委員 事務局から説明があったとおり進めていくことにご異議ないか。

長

委員 (異議なし)

4. その他

委員長 何か委員からお伝えしたいことはございますか。

事務局はいかがですか。

事務局 (次回委員会の日程調整案内)